

朝日連峰山麓

ハチ蜜の森から

No.28



見た目どうってことないですが、しまりにしまったこの重たい雪で、トイレが…。

ハチ蜜の森

採蜜ができるトチやキハダをはじめマンサク、コブシ、カエデ、ヤマザクラ、ドウタン、ウワミズザクラ、ミズキ、クリ、ハクウンボク、タラ、コシアブラ、センノキ、ヌルデ、クズ、イタドリ…と、数多くの蜜源樹や植物を抱える森のこと。ハチ蜜の森キャンドルは、その森の入り口にあります。

編集発行

ハチ蜜の森キャンドル

代表 安藤 竜二

☎990-1573 山形県朝日町立木 825-3

☎とファクシミリ 0237-67-3260

Mail アドレス mitsurou@alto.ocn.ne.jp

ホームページアドレス www.mitsurou.com/

発行日 2006年4月12日

以下のコラムは、17年度「山形県のいのちの教育推進会議」に、地域活動者代表として参加する機会をいただき、書かせていただいたものです。先生方の中、私のような者が場違いに感じましたが、「ものづくり人」として、普段感じていることが、もしかしたら一片の糧になればと、淡い期待で報告させていただきました。

ものづくりの目で見 命と愛情の関係について

「子供が皿に残ったハチミツを最後までぺろぺろなめるようになりました」

ハチミツの森体験教室に参加した子供がハチミツを大切に使うようになったことを、あとからの感想でいただくことがよくあります。それはとても嬉しいことです。

私は、養蜂家の次男に生まれました。現在は、不要なミツバチの巣を原料にして「蜜ろうそく製造」を生業としています。実家の養蜂も少し手伝っています。子供たちに、ネットを被ってミツバチ観察をさせたり、蜜ろうそくを作らせたり、森を案内したり、養蜂体験活動も毎週のように受け入れられるようになりました。この取り組みは今年で17年目になりました。

当初、テーマを「ミツバチと仲良く」にしていましたが、ある時、小さな子供の参加者に「安藤さんはミツバチさんから家も食べ物も奪って悪い人」と名指しで怒られ、悩んだことがありました。確かに、ハチミツや蜜蝋を略奪する私もそれを食べる消費者である参加者の子供達も悪者になってしまう理屈になるのです。悩んだ末に、テーマを「ハチミツ」や「蜜ろう」、花粉交配している「果物」に変えました。「このおいしいハチミツや果物、きれいな灯火の蜜ろうはどうやって作られるのか」その繋がりやしぐさを詳しく知る内容にしました。すると、がんばってくれたミツバチも、重労働の養蜂家も豊かな山形の森も尊重してもらえるようになりました。そこに「ありがたい」気持ちが生まれているようです。

ところで、知らなかったことを知り、素直に



感動していく子供たちの姿はいつも純真で、都会の子も山形の子も同じです。そんな姿を見ると、すべての子供たちが命をかるんじっていると私にはけっして思えません。でも、自殺したり、誰かを死なせてしまったりといった悲しい事件が起きていることも事実です。考えるほど複雑な心境になってしまいます。もしかしたら原因は、「ものづくり」の私が、日頃感じていることに少しだけ通じるかもしれません。

私たちの身の回りの衣食住に関わる「もの」は、ほとんどがインスタントな作りで、相変わらずの使い捨て文化が横行しています。そこに「命」の繋がりが見えづらくなったのではないのでしょうか。いろんな「もの」たちが、どこでどうやって誰がどんな思いで作ったか、そして誰の命をいただいてそれは作られたか。見えないから愛着もわからず、感謝の気持ちもわからず、簡単に捨てたり、壊したり、してしまえるのではないのでしょうか。人の「命」もその延長になりつつあるとしたら、ぞっとしてしまいます。

私の蜜ろうそくの仕事場は、私が根っからの「古いもの好き」「もったいない主義」なので、作業台や机、棚など多くの古い家具に囲まれています。大部分は木造校舎が解体される直前にいただいてきたものです。どれも高級な作りではありませんが、無垢材ですから森で生まれた木の優しいぬくもりを感じます。ちょっとしたデザインや面取り仕上げに作り手の思いも感じられ、同じ「もの作り人」としてはたまらないものです。また、長年多くの子供たちが使ってきた歴史も、いたずら書きや角の丸みなどに現れているので、一つ一つとてもあたたかい雰囲気を感じます。私にとっては、愛着の染み込ん

だ大切な宝物なのです。

でも、今はそのような手作りの衣食住の「もの」を手に入れることは難しい時代です。共働きや核家族化、なんでも手に入る時代になり、家の周りの細工も、着るものも、食べる物すらも、ほとんどが買って来たもので済ませられるようになりました。父親が直してくれた○○とか、母親が作ってくれた○○とか、じいちゃんが採ってきてくれた○○、ばあちゃんが教えてくれた○○とか、昔、子供のためになにかしてあげていたことは、もちろん我が家も含め、ほとんどがお金を出せば解決できるようになってしまいました。子供たちは、そこでは微かな愛情しか得られていないのではないのでしょうか。結局、簡単に捨てたり、壊したり、食べ残したりしてしまえることになるのだと思います。昔は、ものに恵まれなくても、やはりそのような愛情いっぱいのもので囲まれて生活していたことは、きっと今より居心地がよく、もらった愛情の分だけ人や物にも優しく大切にしていれば済んだはずで

私が蜜ろうそくを製造したり、体験教室をするようになった理由は、林道開発や造林事業、ゴルフ場開発など、ハチミツの収穫できる源の森が破壊されようとする中、「多くの人に養蜂のことを知ってもらいたい。森の魅力を伝えたい。人と森の距離を縮めたい」と願ったことからです。ハチミツを採っていたからだけではなく、何代も前から家族はその森の中で生きてきたので、私自身悲しい思いを感じたからでした。

うまく説明できませんが、「人」も、どんな「もの」も、誰かの大切な命をもらって、誰かに大切にされて、その「命」は益々生かされるのだと思います。

大きなことは言えませんが、これからもせめて自分の分野については、きちっと命の繋がりやしくみを紹介していきたいと、改めて感じました。子育ての姿勢も含め、初心に戻らせていただけましたことを深く感謝申し上げます。



いのち

文:永六輔

絵:坪谷令子

理論社 1500円



この命の連鎖については、一昨年に私の蜜ろうを使って描かれ出版された、詩の絵本『いのち』(No.26で紹介)を見ていて整理できたものです。蜜ろうで、素晴らしい本を作って下さり、ありがとうございました。

NEWS (表紙紹介)

工房も雪の被害！

あんなに降り積もった雪も、春がくればやはり溶けだすもので、工房の周りも地面が顔をのぞかせるようになりました。

それにしても大変な冬でした。例年なら、年末や年明けにやっと積もりはじめるのですが、まだ雪囲い率0%の12月はじめから、毎日、毎日雪が降りました。困ったのは、屋根の雪が落ちなくなってしまったことです。いつもなら、こう配のある屋根なので、勝手に落ちるのですが、クリスマスの忙しさが終わり、ストーブを焚く時間が少なくなり、気温も零下が続いてしまいました。1月末、軒先が少し歪みはじめたのを見て、慌てて二連はしごをかけ、高い屋根に登り、尾根を左右に割りました。すると、降りたたん屋根の雪が地響きをたてて落ちました。もう少し上にとどまっていたらと思っただけでしてしまいました。まだ寒い午前中だから、屋根に雪が凍り付いていて安心だと思ったのです。この冬に、雪国のベテラン住民がたくさん亡くなったのは、普段やらないことを、やらなければならなかったことが原因だったのだと痛感しました。

そして、落ちた雪を見てびっくり。一瞬で窓の半分までを隠していました。さらに驚いたのは、落ちた雪が、外にあるトイレの屋根に直撃して、軒先をふっとばしてしまったのです。

少し落ち込んでしまいましたが、気に入らなかった屋根の形だったので、「こんなことでもなければ直せないな」と、良い機会に思うことにしました。



落ちた雪と軒先のふっとんだトイレ

『いのち』永六輔さんと

坪谷令子さんにお会いしました！

昨年、山形市の本屋さんで永六輔さんの「握手とサイン会」に、『いのち』のお礼を一言でも伝えたいと思い参加しました。

蜜ロウで絵を描かれた坪谷令子さんに聞きましたが、蜜ロウの説明を、『いのち』に入れて下さったのは永さんの提案だったのだそうです。

邪魔になったら申し訳ないと、列の最後に並び、緊張しながら小声でお礼を言いました。すると永さんは大きな声で「皆さん、ここに大切な方が会いにきて下さいました」と、私を逆に紹介して下さいました。そして『いのち』のことや、蜜ロウのことも丁寧に説明して下さいました。私は、恥ずかしさと、申し訳なさと、嬉しさの入り交じった意識の中で、さらに緊張してしまいました。

明石市に住んでいらっしゃる坪谷さんとは、神戸に行った折、アトリエにお邪魔しました。坪谷さんは、灰谷健次郎さんの作品の挿絵も多く手がけていらっしゃいます。瀬戸内海を望むマンションのアトリエは、心地よい風が通りぬけ、居心地のいいやさしい空間でした。明石湾の美味しい魚料理をいただきながら、いろいろなお話を伺いました。帰り際に、坪谷さんのルーツの地を舞台に書かれた、灰谷健次郎さんの作品『風の耳たぶ』（角川文庫）をいただきました。とてもやさしい内容でした。

お二人とも、全くやさしい方でした。

ご紹介いただきました！

- ・私のカントリーNo52 (主婦と生活社)
- ・和風が暮らしいい。(主婦と生活社)
- ・仙台発大人の情報誌 りらく (理楽社)
- ・Yui (東北電力株式会社)
- ・2006 自然の恵みカレンダー (ウンノハウス)
- ・日本経済新聞
- ・朝日新聞 (モンジロウ スズメバチ駆除)
- ・木の文化4「樺」
(新建新聞社 白い紙ひこうき大会について)

ありがとうございました。

埼玉県志木市「はらっぱの会」の 皆さんがいらっしゃいました！

7/29～8/2

体験教室では、昨年の夏も県内や宮城県など、たくさんの親子の団体を受け入れました。その中でも特に印象に残ったのは、白いおしゃれな観光バスでいらした「はらっぱの会」の皆さんです。近くの家族旅行村 Asahi 自然観コテージに3泊なまり、※朝日町エコミュージアムや、ハチ蜜の森キャンドルをじっくり体験なさいました。以下、簡単に内容をご紹介します。

集合場所の朝日町エコミュージアムコアセンターでは、エコルーム学芸員の宮森友香さんが出迎えてくれました。朝日町の紹介 VTR を見たあと、「町の宝ものカルタ」を楽しみ、朝日町がどんな町かを、軽く知っていただきました。そして、明治時代に作られたお城のような「木造校舎」を訪ね、「町の案内人」宮本建一さんのお話を聞きました。3階の丸窓からは、最上川沿いに広がる朝日町の田園風景を眺めました。校庭では、※サンクスシャボン玉を飛ばして楽しみました。夜はグループに分かれ、蜜ろうそく1本の灯火で「肝試し」。宮森さんも女の子グループのリーダーになって参加して下さいました。翌日からは、ネットを被って「みつばち観察会」「蜜ろうそくづくり」。「川遊び」では、近くに住む大井寛治君が先生になってくれました。大井君は、私がみつばちの環境学習で関わっていた立木小学校の児童でした。後日「魚を寄せる技が子供たちを魅了した」と、ご父兄から感想をいただきました。そして、河原で薄っぺらな石と流木を拾って帰り「燭台作り」もしました。お父さんたちも子供のようにまっています。夜の「鑑賞会」は盛り上がりました。蜜ろうそくのものもしびが、流木やあたりをやさしく照らし出し、どれも芸術作品でした。お父さんたちの作品も予想以上にみごとで、子供たちやお母さんに尊敬のまなざしだったようです。「森の案内」は、大型バスが入れる県立自然博物館にお願いしました。親切なガイドの皆さんの説明でハチミツの樹「トチノキ」についても教わりました。食事の食材は地元の「サンに市」

でもとめたり、「りんご温泉」で地元の人と交流があったりと、白くてしゃれた大型観光バスの行き来は、町じゅうの小さなニュースになっていたようです。

またいらっしゃるときには、もっともっといろんな朝日町を感じていただこうと考えております。

※朝日町エコミュージアム

環境と住民の関わりを探求し表す「地域まるごと博物館」のようなもの。いろんな分野の朝日町の魅力を学べます。ご利用下さい。パンフレットをお送りいたします。

※サンクスシャボン玉

「大暮山分校 白い紙ひこうき大会」から生まれました。校舎など古いものの苦勞をねぎらい、みんなで飛ばします。



川遊び（撮影はらっぱの会）



サンクス
シャボン玉

詳しくは「はらっぱの会」ホームページを！

<http://www.geocities.jp/harappanokai/>

ハチ蜜の森料理店⑦

ハチミツバナナミルク

十代の頃、養蜂が暇になる冬期間、父だけが南房総の仕事に出かけ、私は山形市の十字屋駅前店 8 階のレストラン「銀座トリコロール」でアルバイトをしていました。ウェイターの他に、毎日、毎日、海老 100 匹、タマネギ 30 個を剥くのが日課でしたので、今でもその技だけは腕に残っています。

ある日、4 階店のパーラーを手伝いに行ったときに、はじめてバナナジュースの存在を知りました。作り方はいたって簡単で、ジューサーにバナナと牛乳と氷を入れ、スイッチを押すだけ。バナナの甘さが少ない時は、ガムシロップで調整していました。バナナと牛乳の甘さと、細かく砕かれた氷ののど越し感が、まだまだ子どもの舌感覚だった私は、いっぺんで好きになってしまいました。

家に帰り、さっそく自分で作り、ガムシロップの代わりにハチミツを入れました。これがまた深い甘みに感じ、しばらくの間、一人で何度も、何度も、作っては飲んでいました。



蜜ロウ利用術⑨

木材の蜜ロウ引き

山形市にある旧県庁「文翔館」は、大正時代に建てられたルネサンス様式レンガ造り三階建てのしゃれた建物です。ここでは、山形の歴史や建物についての展示・資料館にもなっていて、ガイドさんによる親切な説明も受けられます。

10 年ほど前のこと。まだ小さかった子ども達が、いたずらで改修工事の VTR 映像をスタートさせてしまったことがありました。申し訳ないので見ていたら、興味深い映像が現れました。

床のろう拭き作業です。手順は次のような感じでした。①床一面に、粉状のロウを蒔く。② 図のような道具の、大きな網わたしのようなものの上に、炭を置く。床からの距離は 5 センチ位。③一人がそれを抱え、ゆっくり後ずさりしながらロウを溶かしていきます。

④そのあとを二人の職人が布で忙しそうに拭き

あげて進みます。

それ以来私も、机や棚に蜜ロウをたくさん塗るようになりました。たいていは、仕事で使っているガスバーナーで強引に蜜ロウを溶かし、急いで拭いています。しかし、時々板そのものを焦がしてしまうこともありましたので、あまりお薦めはできません。小さな本棚は、ファンヒーターで温めながら塗ったこともありました。建築関係の友人に聞きましたが、工業用の強力なドライヤーがあるそうです。

簡単に塗り込みたい時は、100%蜜ロウにはなりません。荳胡麻油など植物油と一緒に、湯煎で溶かしてペースト状にしたもので塗ると簡単です。蜜ロウ:植物油の割合は、1:3 位だったと思います。

ところで、蜜ロウを塗ってどんな良いことがあるかという、合板を使わないで、蜜ロウを染み込ませた木材を使えば、シックハウス症候群を防ぐことになります。私の息子も、でき上がったばかりの学校に、しかも窓を開けられない冬から登校させられ、喘息になったことがありました。あとで聞いた話ですが、目を充血させていた児童もたくさんいたそうです。

また、以前取材にいらした赤池 学さんは、蜜ロウを染み込ませていれば、多少の傷なら元通りにしてしまう自己修復力ができると、著作本『ものづくりの方舟』（講談社）で紹介下さいました。

それから、淡い自然な色艶が出るのも、私は好きです。普段でも軽く拭きなおすと、淡い艶が戻ります。木材の種類にもよりますが、染み込めば染み込むほど、深い色合いになるようです。工房の木造校舎からいただいた机や椅子には、ぴったりのワックスです。今年は、工房の外壁の板にも塗ってみようかと考えています。



房総での越冬

「I love you」の歌声の中、タレントの速水もこみちが、彼女から半ハート模様の手編みのセーターをもらう、ダイハツ「タント」のテレビCMを見て、びっくり。

見覚えのある海水浴監視所の黄色い建物がちらっと映ったのです。おそらく間違いはないとおもいます。そこは、私が子どもの頃、家族五人で、毎年冬の間、六畳一間だけの海女小屋を借りて暮らしていた南房総千倉町瀬戸浜海岸です。雪が多い山形は、年末年始休みと春休みのほかに、寒休みもありましたので、それぞれを少しずつ余計に休んで、房総へ長く滞在することができたのです。CMを見るたびに、いろいろな思い出が浮かんできました。

ミツバチは、花がなくなる秋になると、食いぶちを減らすために徐々に産卵をやめ、家族を減らして、春がくるまでじっとしています。そのまま山形でも冬を越せないことはありませんが、トチノキの花が咲く一番の収穫期までに、最も良い群れに増やしたいので、あたたかくて春の早い南房総で冬を越して来るのです。

南房総は、お花畑で有名ですが、ハチミツを収穫するには至れませんが、砂糖水を与えます。それだけなら山形でもできそうですが、ミツバチを育てるには、もう一つ、この季節の山形では手に入らない大切な餌が必要です。それは花粉です。南房総には、冬といえどもなにかしらは花が咲いています。2月になれば、春がはじまり、菜の花や椿、空豆、切り花用の花、庭先の花、レンゲ、梅、桜と、山形に帰るまでに、いろいろな花が花粉をもたらしてくれるのです。初冬まで花のない雪国に耐えてきたミツバチ達にとって、南房総は南国リゾートに感じているに違いありません。

それは、私たち子ども三兄弟にとっても同じでした。なにしろ、冬だというのに雪が全くないので。人の背丈ほどもあるサボテンや、巨大なヤシの木、あちこちにごろごろ転がっている夏みかんなど、南の島を連想させてくれる材



料は充分すぎるほどありました。

ここでの暮らしは、毎日が愉快的ことの連続でした。放置されている廃船で漁師ごっこをしたり、いくらでも流れ着く貝殻や異国の漂流物を拾い集めたり、干潮時の潮溜まりで魚を捕まえたり。父が竹の棒でひっぱり上げたタコに吸い付かれて、全身から力が抜けそうになったこともありました。でも、おいしかった。

母は、一つだけのコンロで、摘んできた岩のりのみそ汁を作り、油ののった鯡やサバの開きを焼いてくれました。子どもながらに、おいしくて、何杯もおかわりしたものです。2月の私の誕生日は、毎回その小さな海女小屋で祝ってもらいました。そうとう嬉しかったのか、サッカーボールと、ガッチャマンの下敷きをもらったことは今でも思い出されます。

銭湯に行くと腕にポパイのような「いかり」の入れ墨をした漁師たちがいました。強い喋り方をするので、少し怖い存在でした。

小屋にはテレビがないので、いつもラジオを聞いていました。電線のそばに近づけると感度が良くなるのが不思議でした。

夜は、小さな部屋に家族五人が片寄せ合って寝ました。母が毎晩、なにかしら絵のない本を読んでくれました。心地よい波の音を背景に、お話の世界を創造するのが好きでした。

早朝の朝日は、とてつもなく大きく現れ、海風にのせて帆をどこまでも遠く飛ばしたり、毎日通ってくる野良犬と仲良しになったり…。思い出に切りはありません。

振り返ると、山の子にとって南房総瀬戸浜海岸の暮らしは、異なる環境を感じ、家族を感じる、素晴らしすぎる体験の連続でした。

ミツバチ観察会のある

朝日町エコミュージアム「音」紀行

ちょっと面白い企画です。私の所属する朝日町エコミュージアムで、「音」を探しながら、見学場所を訪ねるワークショップが開催されます。世界に一つの空気神社、湖面を葦の島が自由に浮遊する不思議な大沼の浮島、明治時代に作られたお城のような木造校舎。そしてハチ蜜の森キャンドルでは、ネットを被ってミツバチ観察会と蜜ろうそく作り。後日、音の展示会も開催予定です。

私が毎年講座でお世話になっている福島県伊達市の霊山こどもの村「遊びと学びのミュージアム」との共催事業なので、参加費無料です。この機会をどうぞお見逃しなく。

(南東北サンプラン助成事業)

- 日時 6月11日(日) 午前10:30～夕方
申 込 ハチ蜜の森キャンドルまで
定 員 22人 お弁当をご持参下さい

今年も連休から工房ショップを営業

めったに誰も来ない冬は日曜日もお休みしていましたが、今年も5月の連休より営業いたします。

■12月までの土、日、祭日。10:00～夕方

- ・蜜ろうそくの販売
- ・蜜ろうそく作り体験(予約制)
- ・朝日町エコミュージアムのサテライト

(現地見学場所としての説明)

※ 平日は留守の時がありますので、電話などで必ず確認して下さい。

今年の白い紙ひこうき大会

今年は雪による校舎損壊が予想されますので、開催は未定です。開催できるなら8月6日もしくは12日を予定しております。6月までには、決定する予定です。

ホームページ <http://lavo.jp/ryuzi/>

金子富之八ツ沼幻想画展(仮称)

東北芸術工科大学博士課程の日本画家金子富之氏の描いた幻想画を、蜜ろうそくの灯りが照らします。会場は明治時代に作られたお城のような木造校舎「旧三巾分校」です。8月頃の開催をめざして計画中です。ご期待下さい。ちょっと怖い絵もありますよ！

朝日町の最上川大特集！

朝日町エコミュージアムでは、本年度は「最上川」をテーマに活動をはじめます。ラフティング、ミニ釣り大会、芋煮会、講座、シンポジウム、ミニツアーなど、いろいろなアイディアが出され、ただ今計画中です。楽しい企画が盛りだくさんになります。ぜひご参加下さい！

(問) エコルーム ☎0237-67-2128 担当/宮森

編集後記-----

年明けに父(69才)が亡くなり、煩雑な日を過ごしておりました。納期を大幅に遅れてしまったり、体験を直前に断ったり、お願いされた事に手もつけられずいたり、多くの皆様にご迷惑をおかけしました。通信発行もずいぶん遅くなってしまいました。心からお詫び申し上げます。

前厄、後厄つき「大厄」の、どさくさな3年間が終わり、最後に切り札的な存在の父を亡くし、人生の折り返しに大きな節目になったようです。蜜ろうそく製造も19年目。なんだか時間の流れが、さらに加速しているように感じます。

「人生の後半戦に入ったことを受け入れなければ」という実年齢の私と、幼稚な精神年齢のまま成長できずにいる私が、日々葛藤しています。プラス思考の権化のような私でしたが、こここのところ、何事も焦ってしまうマイナス思考が続いていました。恥ずかしいことに不眠症にも悩まされました。これも大切な節目づくりの印かも知れません。

おかげさまで近頃、やっと気を取り戻せました。少しだけ精神年齢も実年齢に近づいたかも知れません。でも、今度はやりたいことをニヤニヤ考えていると、また眠れなくなってしまいます。人生って短すぎますね。どう計算しても、私は120才まで元気に生きないと足りないです。

川遊び先生の大井寛治君宅で、アメリカンショートヘア雑種の、かわいい子猫が4匹生まれました。現在、必死で里親を探しています。よろしければ一匹いかがですか。私は交通事故で死なせてしまった愛猫「ニア」のトラウマがまだ…。

通信購読について

- ・定期購読を希望される方は、1000円(およそ3年分、80・50円切手可)をお送り下さい。
- ・購読期限は、お送りした時の封筒の住所下に、たとえば7-27と号数を明記しています。
- ・購読費が切れた時は、こちらから振り込み用紙を同封させていただいております。